

# 英語授業評価およびニーズ分析にみる傾向と課題 — 学生の動機付けを高めるため教員に何ができるか —

## Tendencies and Problems Manifested in English Class Evaluation and Needs-Analysis — How can a teacher enhance students' motivation? —

市 島 清 貴

はじめに

我が国は、加速的に進む国際化に対応すべく、様々な取組みを実施している。文部科学省が具体的なアクションプランとして 2002 年に、「『英語を使える日本人』の育成のための戦略構想」を打ち出し、翌年「『英語を使える日本人』の育成のための行動計画」を発表した。当時の文部科学大臣であった遠山(2003)は、「小学校・中学校・高等学校・大学等の学校関係者や、英語教育に関わるあらゆる関係者が、それぞれの立場でこの目標を認識し、改善に取り組んでほしい」と語っている。大学教育に携わる者に対しては、「大学を卒業したら仕事で英語を使える」だけの英語力を身に付けさせることをこの行動計画で求めているのだ。本学は、特に産業界の要請に応えるべく、実用的な英語力の育成を目指したプログラムを実施しているが、時流や環境の変化を敏感に察知して、継続的にその評価・改善を推進していくことは、大学教員としての責務であろう。

「英語が使える日本人の育成」が叫ばれている一方、多くの大学において大学生の学力低下が問題視されるようになり、従来のカリキュラムを従来の指導法で教授しようとするれば、授業が成立しにくくなってきている。小野(2005)によれば、「近年の 18 歳人口の減少、入試の多様化等による入学者選抜競争の緩和は大学生の学力の低下問題をもたらしている。その中で多くの大学が抱えるもっとも大きな問題は、優秀な学生の大幅な減少ではなく、同じ大学・学部・学科の新入生間の基礎学力幅が増大し、授業が成り立ちにくくなってきたことである。」

本学も例外ではないであろう。筆者は、下位層の学生に対して、効果的な英語授業を展開してきたとは言い難い。さらに、今年度の本学に着任したばかりであるので、年度当初の授業は、学生の実際の英語力や学習意欲等をよく理解していないままに行なった。そのため、授業の時間配分や、アクティビティを計画通りにできなかったことが度々あった。

それゆえ本学の実態を早く把握するために、授業後に学生から感想を聞いたり、コメントを書いてもらったりして、幾度も授業方法・進度の軌道修正をして、彼らの英語学習の目的やニーズに近づくよう努力をしてきた。だが、十分な対策を講じることができた訳では、決してない。

### 1. 研究の目的

今回の研究の目的は、前期が終わるにあたって行った学生の授業評価・ニーズ調査を分析することにより、後期以降の筆者の英語授業をいかに展開してゆくべきかを考察し、指導法の向上を図ることである。近年多くの大学では独自に授業評価やニーズ分析を行っている。中でも、医療系、看護系、工学系の学生を対象にした広範な分析調査研究を横山ら(2005)が報告しているが、教員・学生のニーズを把握した、シラバスと教材作成を目指す必要性があると提言している。また、本学においては、近年入学してきた学生の英語学習の実態調査が行われていないことから、本研究が本学の英語教育全般の改善の一助となれば幸である。

### 2. 調査対象クラス

本学の経営情報学部経営情報学科1年生は、前期に必修科目英語Ⅰを履修し、後期に同じクラスで英語Ⅱを履修する(週2コマ、2単位)。今回の調査は、その中の筆者が担当した1クラス(24名:男子21名、女子3名)を対象とし、彼らに対して前期の最終授業時に「授業評価・ニーズ調査」を実施した。このクラスは、週1コマでTOEIC受験対策の教科書を使用してリスニングとリーディングを中心とした授業を行い、もう1コマで、筆者作成のプリントを使用したタスク中心の授業を行った。若干の遅刻者はいるものの、出席率は93%と高く、クラスの雰囲気は明るく、伸び伸びとしている。

### 3. 調査の目的

本学の経営情報学部経営情報学科では、同じ担当者による週2時間の必修の英語を1年生が全員履修することになっている。無作為にクラス分けした筆者の担当する1年生クラスを対象に、前期の英語授業に対する感想や要望、また学習に対する意識や意欲等といった学生の実態を深く知ることによって、今後の指導方法の向上を図り、彼らのモチベーションを高めることがこの調査の目的である。

### 4. 調査の方法

前期授業の最後に本調査を実施した。本音を語らせるためには、無記名式のアンケート調査をするべきとの考え方もあるが、対象者数が少人数であることから、筆跡から個人を

特定できることと、回答に責任を持って正直に取り組んでもらいたいとの思いから、記名式にした。また、北海道大学(2005)が実施した「記名式と無記名式の授業評価の比較では統計的に有意な差はないと言える」という研究結果があるので、参考にさせてもらった。調査項目のモデルは、他に Richard (2005)を援用した。調査内容は、前半が授業評価に関するもので、1. あなたにとって英語とは、2. 英語授業に関して、3. 授業者に関して、4. 意欲的に取り組んだタスクとは。続いてニーズ調査として、5. 英語を学習する目的とは、6. どんな英語力を身につけたいか、7. どんな授業を望むか、8. どんな評価を望むか、という8項目である。調査結果については筆者が真摯に受け止め、今後の授業改善に役立てたいため、忌憚のない意見を聞かせてもらいたい旨を学生に伝え、それを十分に理解してもらった上で行った。回答の仕方については、それぞれの設問について、該当するものを選択肢から選んで○をつける(評点 5=「そう思う」、4=「どちらかと言えばそう思う」、3=「どちらとも言えない」、2=「どちらかと言えばそう思わない」、1=「そう思わない」)の5段階とした。また、特にコメントがある場合は、各項目ごとに自由に記述をしてもらえるよう欄を設けた。

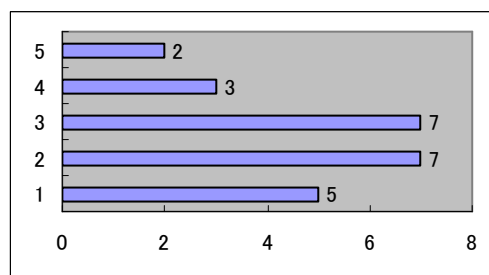
## 5. 調査分析

各調査項目における評点の人数、クラス全体でのパーセンテージ、平均値を示し、筆者の考察を以下に記す。平均値は3点を基準とし、それを上回った場合は質問を肯定的に捉え、また下回った場合はその反対であることを示す。

### 5.1. (授業評価) あなたにとって英語とは

問1. 英語は好きですか

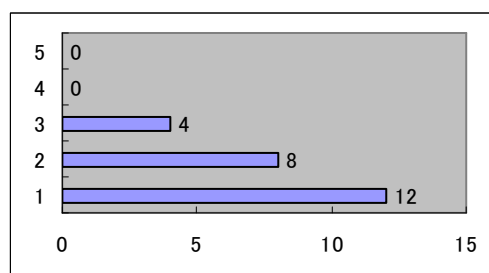
5点	そう思う	2人	8.3%
4点	どちらかと言えばそう思う	3人	12.5%
3点	どちらとも言えない	7人	29.2%
2点	どちらかと言えばそう思わない	7人	29.2%
1点	そう思わない	5人	20.8%
平均		2.6点	



\*グラフは全て、縦軸が上から順に、5点;そう思う、4点;どちらかと言えばそう思う、3点;どちらとも言えない、2点;どちらかと言えばそう思わない、1点;そう思わない。横軸は人数を示す。

問2. 英語は得意ですか

5点	そう思う	0人	0%
4点	どちらかと言えばそう思う	0人	0%
3点	どちらとも言えない	4人	16.7%
2点	どちらかと言えばそう思わない	8人	33.3%
1点	そう思わない	12人	50%
平均		1.7	

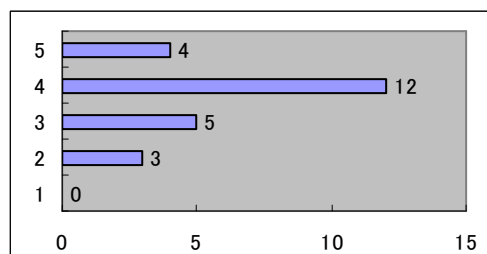


「英語を得意」とする回答はなく、「好きだ」とする者も、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を足しても 20.8%と少数である。自由記述式の回答には、「中学校から英語が苦手だった」、「苦手だから嫌いになった」、「英語は難しすぎる」というものがあった。このように内発的動機（学習自体が目的で、好きだから勉強したい）が不足している学生に対しては、容易いことではないが、彼らの苦手意識を克服させ、英語学習に取り組んでもらうため、教員として最大限の努力を惜しんではならない。今からでも遅くはない。英語を得意になろう、好きになろう、英語は難しいものではない、と発想を変えさせる必要がある。

## 5.2. 英語授業に関して

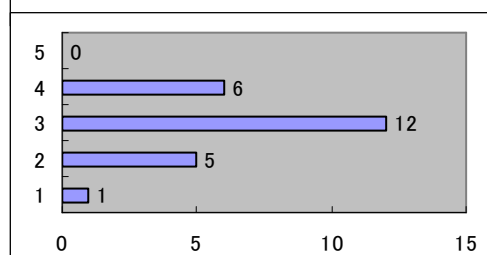
問 3. 授業を真剣に受けましたか。

そう思う	4人	16.7%
どちらかと言えばそう思う	12人	50%
どちらとも言えない	5人	20.8%
どちらかと言えばそう思わない	3人	12.5%
そう思わない	0人	0%
平均	2.4	



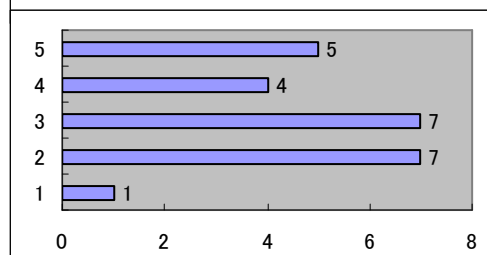
問 4. 授業内容は理解できましたか。

そう思う	0人	0%
どちらかと言えばそう思う	6人	25%
どちらとも言えない	12人	50%
どちらかと言えばそう思わない	5人	20.8%
そう思わない	1人	4.2%
平均	3	



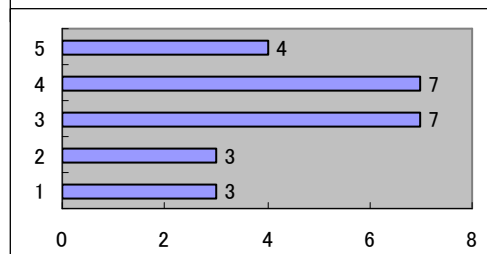
問 5. 授業の進行速度は適切でしたか。

そう思う	5人	20.8%
どちらかと言えばそう思う	4人	16.7%
どちらとも言えない	7人	29.2%
どちらかと言えばそう思わない	7人	29.2%
そう思わない	1人	4.2%
平均	3.2	



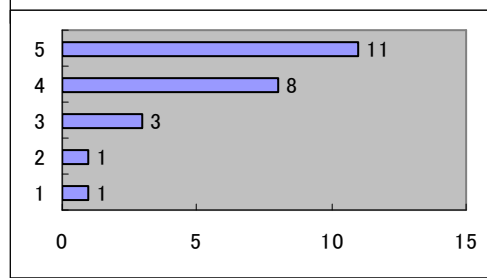
問 6. 楽しいと思った授業がありましたか。

そう思う	4人	16.7%
どちらかと言えばそう思う	7人	29.2%
どちらとも言えない	7人	29.2%
どちらかと言えばそう思わない	3人	12.5%
そう思わない	3人	12.5%
平均	3.3	



問 7. 授業中に辞書を活用しましたか。

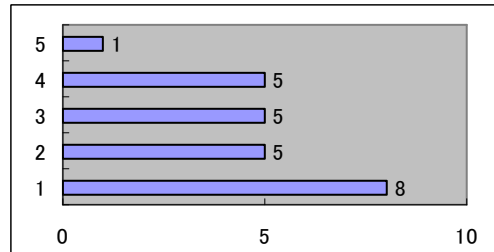
そう思う	11人	45.8%
どちらかと言えばそう思う	8人	33.3%
どちらとも言えない	3人	12.5%
どちらかと言えばそう思わない	1人	4.2%
そう思わない	1人	4.2%



平均 4.1

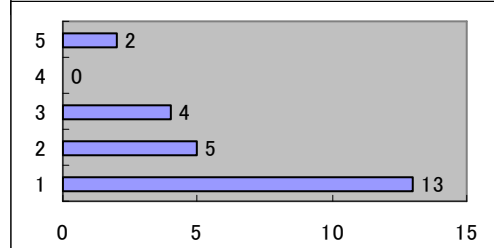
問 8. ノートを取りましたか。

そう思う . . . . . 1 人 4.2%  
どちらかと言えばそう思う . . . . . 5 人 20.8%  
どちらとも言えない . . . . . 5 人 20.8%  
どちらかと言えばそう思わない . . . . . 5 人 20.8%  
そう思わない . . . . . 8 人 33.3%  
平均 2.4



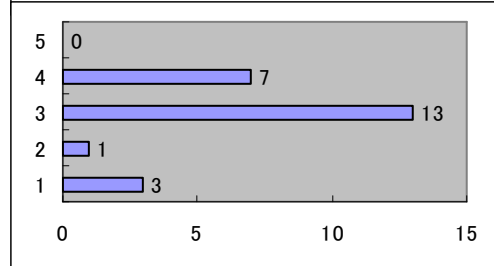
問 9. 授業・宿題以外でも英語の学習をしましたか。

そう思う . . . . . 2 人 8.3%  
どちらかと言えばそう思う . . . . . 0 人 0%  
どちらとも言えない . . . . . 4 人 16.7%  
どちらかと言えばそう思わない . . . . . 5 人 20.8%  
そう思わない . . . . . 13 人 54.2%  
平均 1.9



問 10. 4 月からあなたの英語力は向上しましたか。

そう思う . . . . . 0 人 0%  
どちらかと言えばそう思う . . . . . 7 人 29.2%  
どちらとも言えない . . . . . 13 人 54.2%  
どちらかと言えばそう思わない . . . . . 1 人 4.2%  
そう思わない . . . . . 3 人 12.5%  
平均 3



「授業態度」や「ノートの取り方」について

ての間に、謙遜をして低い評点をつけた学生もいたかもしれないが（共に平均値 2.4）、それを考慮に入れても、この結果は授業者として看過できない。授業中の指示や運営に問題があることは明白である。「辞書を活用しましたか」の問は、頻繁に活用せよと筆者が厳しく指導していたこともあり、平均値は高い（平均値 4.1）。「授業・宿題以外でも英語の学習をしましたか」の問は、平均値が他のどの問よりも低い 1.9 である。効果的に学習の動機付けを施さないと、自発的に英語に取り組むことは難しいといえる。専修大学経営学部の授業評価報告書にもこれに関連する調査結果が示されている。学生自身の取組みの評価に対して「予習復習、参考文献・図書館の活用の三項目は普通を下回っており、授業に対する積極性が十分とは言い難い。受身の姿勢から脱却させたい(田口, 2002)」との注釈が記されている。他大学でも抱えている問題である、自主的に学ぶ態度の涵養については、真剣に検討していかなければならない。

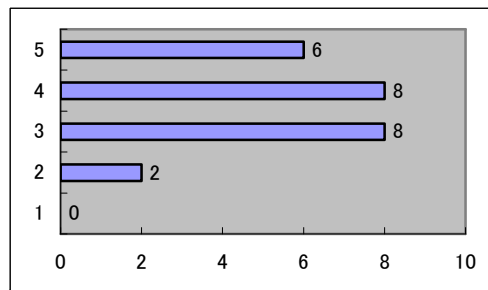
また、「授業の理解度」、「進行速度」、「楽しい授業」、「英語力が向上したか」についてが、ほぼ 3 点に近いことをどう理解したらよいのであろうか。ほどほどに良かったと捉えるか、関心のなさの表れか、はっきりとした原因は分からない。

授業に関して記述式の回答は、「タスクを行う時間が足りない」、「会話時間を増やす」、「映画鑑賞」、「難易度を下げた問題にして欲しい」等、多様な回答が見られた。易しく楽しい授業を求める学生が多いのだろう。

### 5.3. 授業者に関して

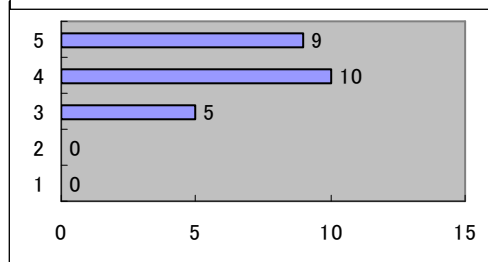
問 11. 教員は分かりやすく教えていましたか。

そう思う	6人	25%
どちらかと言えばそう思う	8人	33.3%
どちらとも言えない	8人	33.3%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	0人	0%
平均	3.8	



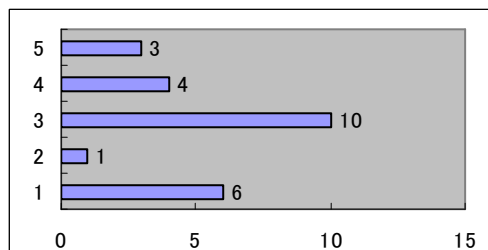
問 12. 教員に熱意が感じられましたか。

そう思う	9人	37.5%
どちらかと言えばそう思う	10人	41.7%
どちらとも言えない	5人	20.8%
どちらかと言えばそう思わない	0人	0%
そう思わない	0人	0%
平均	4.2	



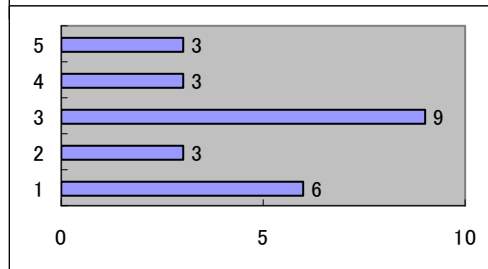
問 13. 騒がしい学生に対し、教員はもっと注意すべきでしたか。

そう思う	3人	12.5%
どちらかと言えばそう思う	4人	16.7%
どちらとも言えない	10人	41.7%
どちらかと言えばそう思わない	1人	4.2%
そう思わない	6人	25%
平均	2.9	



問 14. 居眠りしている学生に対し、教員はもっと注意すべきでしたか。

そう思う	3人	12.5%
どちらかと言えばそう思う	3人	12.5%
どちらとも言えない	9人	37.5%
どちらかと言えばそう思わない	3人	12.5%
そう思わない	6人	25%
平均	2.8	



「居眠りをしている学生に対しては、『注意すべきでない』とする傾向が高い。学生は授業態度が悪いために成績を下げられても、それは自己責任だと考えているのだろうか。とすると授業を中断し、長々と注意をしたことが幾度かあったが、他の真面目にしている学生に対して、不利益を与えていたことになる。遅刻や私語は他の学生に迷惑を掛ける行為であるため、注意せざるを得ないが、その注意自体が授業妨害となってしまうことは時として起こる。主客転倒とならずに、魅力ある授業運営によって、リズムを崩すことなく、それらが自然と改善していくことが求められる。

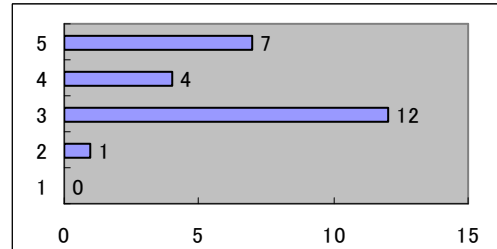
「教員に熱意が感じられたか」と「教員が分かりやすく教えていたか」の間に高得点が

ついたことは、教員と学生の関係は、悪くはないと理解できる。

#### 5.4. 意欲的に取り組んだタスクとは

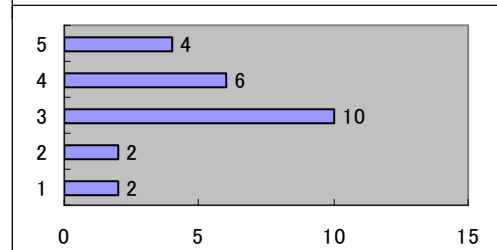
問 15. e-mail で課題を提出すること

そう思う	7 人	29.2%
どちらかと言えばそう思う	4 人	16.7%
どちらとも言えない	12 人	50%
どちらかと言えばそう思わない	1 人	4.2%
そう思わない	0 人	0%
平均	3.7	



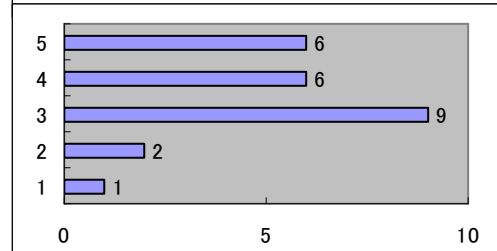
問 16. 英語の自己紹介活動

そう思う	4 人	16.7%
どちらかと言えばそう思う	6 人	25%
どちらとも言えない	10 人	41.7%
どちらかと言えばそう思わない	2 人	8.3%
そう思わない	2 人	8.3%
平均	3.3	



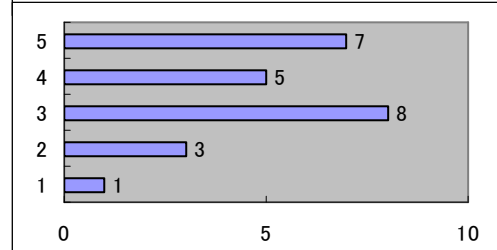
問 17. サッカーに関する英語表現

そう思う	6 人	25%
どちらかと言えばそう思う	6 人	25%
どちらとも言えない	9 人	37.5%
どちらかと言えばそう思わない	2 人	8.3%
そう思わない	1 人	4.2%
平均	3.6	



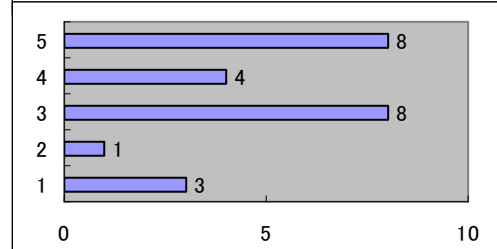
問 18. バasketボールに関する英語表現

そう思う	7 人	29.2%
どちらかと言えばそう思う	5 人	20.8%
どちらとも言えない	8 人	33.3%
どちらかと言えばそう思わない	3 人	12.5%
そう思わない	1 人	4.2%
平均	3.6	



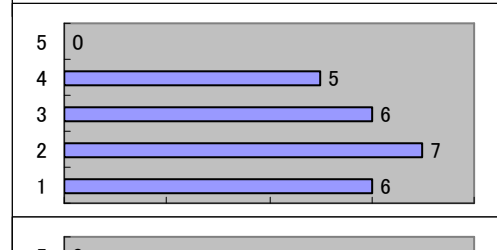
問 19. 野球に関する新聞記事

そう思う	8 人	33.3%
どちらかと言えばそう思う	4 人	16.7%
どちらとも言えない	8 人	33.3%
どちらかと言えばそう思わない	1 人	4.2%
そう思わない	3 人	12.5%
平均	3.5	

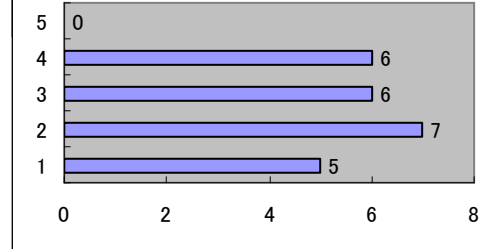


問 20. 教科書 TOEIC TEST・文法

そう思う	0 人	0%
どちらかと言えばそう思う	5 人	20.8%
どちらとも言えない	6 人	25%
どちらかと言えばそう思わない	7 人	29.2%
そう思わない	6 人	25%
平均	2.4	



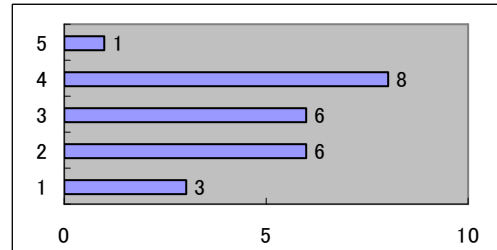
問 21. 教科書 TOEIC TEST・読解



そう思う・・・・・・・・・・・・・・・・0人 0%  
 どちらかと言えばそう思う・・・・6人 25%  
 どちらとも言えない・・・・・・・・6人 25%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・7人 29.2%  
 そう思わない・・・・・・・・・・・・5人 20.8%  
 平均 2.5

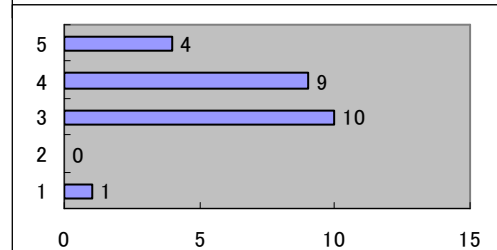
問 22. 教科書 TOEIC TEST・リスニング

そう思う・・・・・・・・・・・・・・1人 4.2%  
 どちらかと言えばそう思う・・・・8人 33.3%  
 どちらとも言えない・・・・・・・・6人 25%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・6人 25%  
 そう思わない・・・・・・・・・・・・3人 12.5%  
 平均 2.9



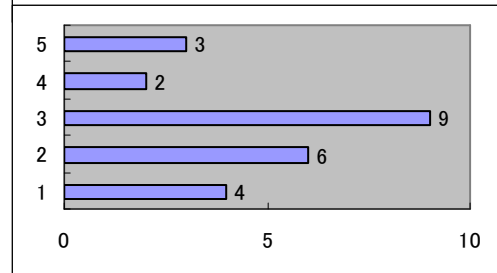
問 23. 読解のプリント・問題付

そう思う・・・・・・・・・・・・・・4人 16.7%  
 どちらかと言えばそう思う・・・・9人 37.5%  
 どちらとも言えない・・・・・・・・10人 41.7%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・0人 0%  
 そう思わない・・・・・・・・・・・・1人 4.2%  
 平均 3.6



問 24. 英作文

そう思う・・・・・・・・・・・・・・3人 12.5%  
 どちらかと言えばそう思う・・・・2人 8.3%  
 どちらとも言えない・・・・・・・・9人 37.5%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・6人 25%  
 そう思わない・・・・・・・・・・・・4人 16.7%  
 平均 2.8

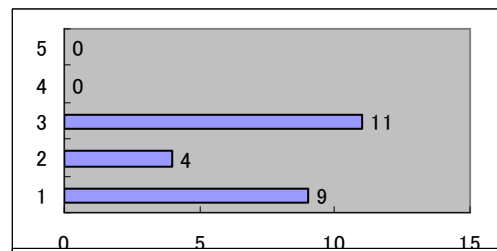


「意欲的に取り組んだタスク」の問の多くが、  
 評点が高いことは、授業における自身の取り組む姿勢を良いと評価したと解釈される。しかし、「TOEIC の教科書を使つての文法」、「読解」、「リスニング」、そして「英作文」の評点が低い。TOEIC そのものに関心が低いということと、英作文も含め筆者の与えた課題指示が、かなり難しかったことも否めない。自由形式の回答の中に、音楽を扱ってほしいとの要望があったが、学生にとって英語を一番身近に感じるのは、音楽なのであろう。

5.5. (ニーズ調査) 英語を学習する目的とは

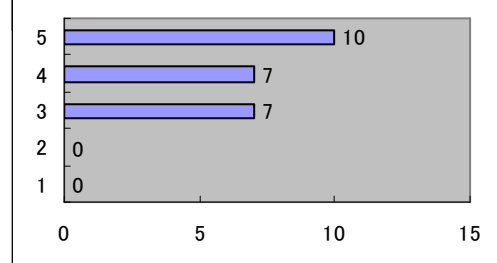
問 25. 英語が好きだから

そう思う・・・・・・・・・・・・・・0人 0%  
 どちらかと言えばそう思う・・・・0人 0%  
 どちらとも言えない・・・・・・・・11人 45.8%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・4人 16.7%  
 そう思わない・・・・・・・・・・・・9人 37.5%  
 平均 2.1



問 26. 英語力を身につけたいから

そう思う・・・・・・・・・・・・・・10人 41.7%

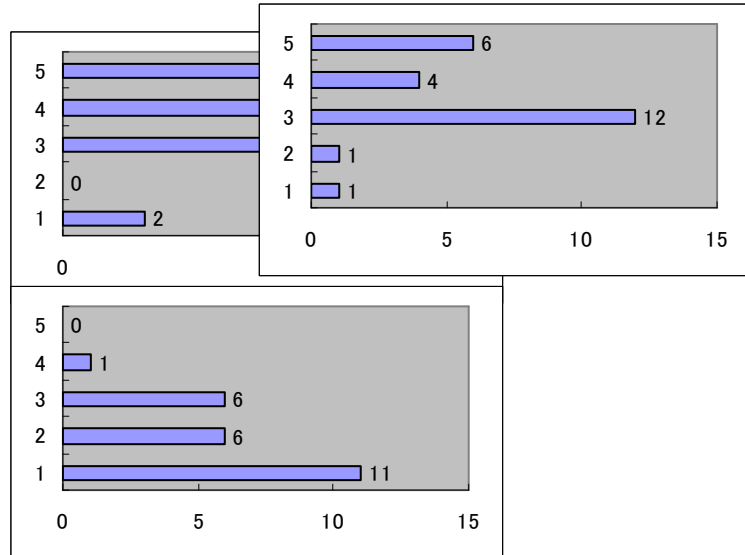




どちらかと言えばそう思う・・・7人 29.2%  
 どちらとも言えない・・・7人 29.2%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・0人 0%  
 そう思わない・・・0人 0%  
 平均 4.1

そう思う・・・6人 25%  
 どちらかと言えばそう思う・・・4人 16.7%  
 どちらとも言えない・・・12人 50%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・1人 4.2%  
 そう思わない・・・1人 4.2%  
 平均 3.5

問 27. 将来英語が必要になると思うからから  
 そう思う・・・7人 29.2%  
 どちらかと言えばそう思う・・・9人 37.5%  
 どちらとも言えない・・・6人 25%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・0人 0%  
 そう思わない・・・2人 8.3%  
 平均 3.8



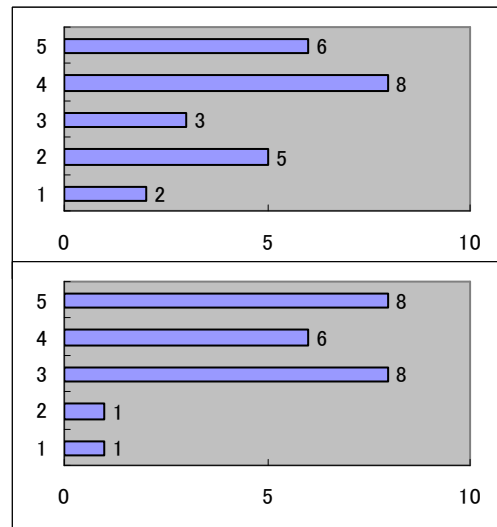
問 28. 英検や TOEIC 等の検定試験を受けるから  
 そう思う・・・0人 0%  
 どちらかと言えばそう思う・・・1人 4.2%  
 どちらとも言えない・・・6人 25%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・6人 25%  
 そう思わない・・・11人 45.8%  
 平均 1.9

問 29. 卒業・進級に必要な単位を取るためだけ

学生は、「好きだから勉強したい」のではないのは明らかである（平均値 2.1）が、明確に「英語力を身につけたい（平均値 4.1）」という希望を持ち、「将来的に必要なから（平均値 3.8）」学ぶという回答が多数を占めた。更に「卒業・進級に必要なだから（平均値 3.5）」という傾向が高いが、これは外発的動機（報酬志向）によるものと言えるだろう。「検定試験に関心が薄い」（平均値 1.9）のは、就職活動の実感が沸かない1年生には、当然の結果かもしれない。英語を学習すると将来役立つとか、就職に有利であるとか、人生のプラスになるといった外発的動機付けからも、学習行動が生起されると考えられる。

### 5.6. どんな英語力を身につけたいか

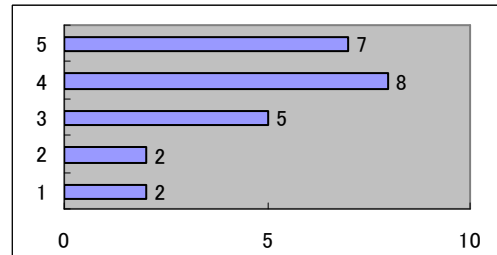
問 30. 海外生活に困らない英会話力  
 そう思う・・・6人 25%  
 どちらかと言えばそう思う・・・8人 33.3%  
 どちらとも言えない・・・3人 12.5%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・5人 20.8%  
 そう思わない・・・2人 8.3%  
 平均 3.5



問 31. ある程度外国人と会話ができる  
 そう思う・・・8人 33.3%  
 どちらかと言えばそう思う・・・6人 25%  
 どちらとも言えない・・・8人 33.3%  
 どちらかと言えばそう思わない・・・1人 4.2%  
 そう思わない・・・1人 4.2%  
 平均 3.8

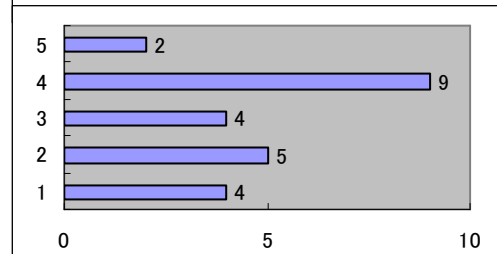
問 32. 道案内ができる

そう思う	7人	29.2%
どちらかと言えばそう思う	8人	33.3%
どちらとも言えない	5人	20.8%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	2人	8.3%
平均	3.7	



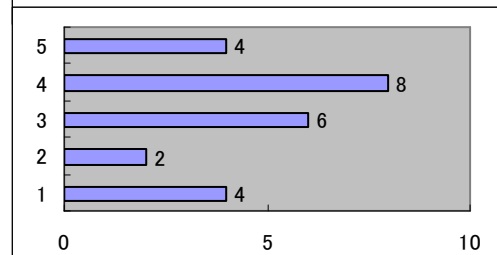
問 33. ある程度英字新聞や雑誌が理解できる

そう思う	2人	8.3%
どちらかと言えばそう思う	9人	37.5%
どちらとも言えない	4人	16.7%
どちらかと言えばそう思わない	5人	20.8%
そう思わない	4人	16.7%
平均	3	



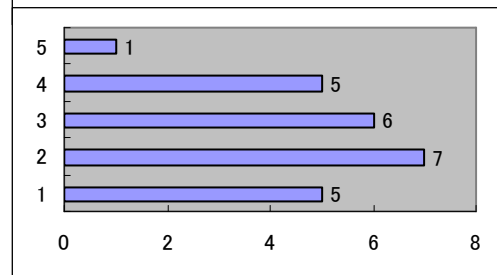
問 34. ある程度洋楽が理解できる

そう思う	4人	16.7%
どちらかと言えばそう思う	8人	33.3%
どちらとも言えない	6人	25%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	4人	16.7%
平均	3.3	



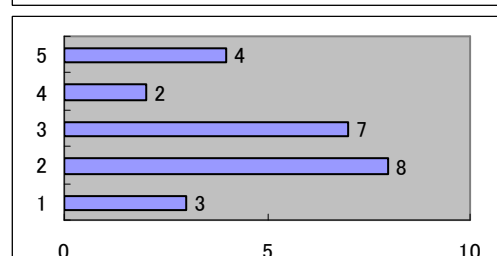
問 35. 専門書が読めるリーディング能力

そう思う	1人	4.2%
どちらかと言えばそう思う	5人	20.8%
どちらとも言えない	6人	25%
どちらかと言えばそう思わない	7人	29.2%
そう思わない	5人	20.8%
平均	2.6	



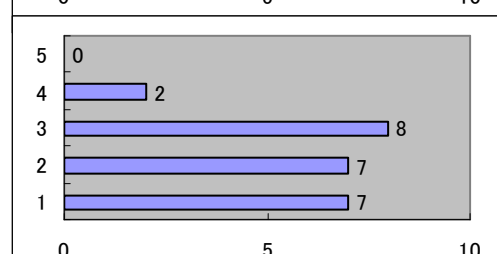
問 36. 字幕なしで洋画が理解できるリスニング能力

そう思う	4人	16.7%
どちらかと言えばそう思う	2人	8.3%
どちらとも言えない	7人	29.2%
どちらかと言えばそう思わない	8人	33.3%
そう思わない	3人	12.5%
平均	2.8	



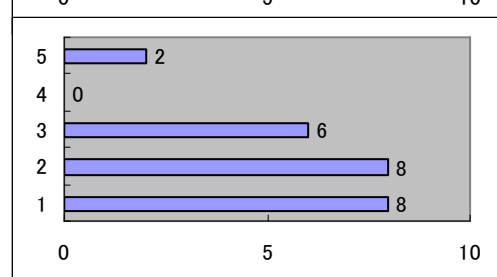
問 37. 人前で演説ができるスピーキング能力

そう思う	0人	0%
どちらかと言えばそう思う	2人	8.3%
どちらとも言えない	8人	33.3%
どちらかと言えばそう思わない	7人	29.2%
そう思わない	7人	29.2%
平均	2.2	



問 38. 国際電話がかけられる

そう思う	2人	8.3%
どちらかと言えばそう思う	0人	0%
どちらとも言えない	6人	25%
どちらかと言えばそう思わない	8人	33.3%
そう思わない	8人	33.3%
平均	2.2	



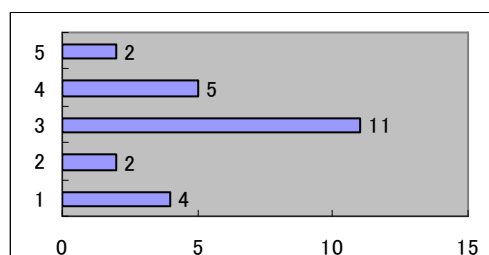
どんな英語力を身につけたいかとの問の回答は、海外旅行等で必要とされる運用能力と社会に出てビジネス上必要とされる英語力とに区別してみると、はっきりとした違いが出ている。換言すれば、比較的易しい英語と高度な英語レベルとに分けて考えた時、易しい英語ができれば満足だと考える学生が多いことが伺える。専門書や英字新聞が読めるリーディング能力や映画の聞き取り能力、スピーチ能力といったハイレベルな英語を学習してまでして、習得する必要はないと考えている。記述式での回答では、「世界共通語である英語の日常会話能力」、「社会に出るための最低限の英語力」、「就職にプラスにするための英語力」、「単語だけでも身につけたい」等があった。

教養科目である英語について、具体的な目標を持ってと言われても、大学に入学して4ヶ月足らずの1年生にとっては、イメージが沸かないとしても頷ける。

### 5.7. どんな授業を望むか

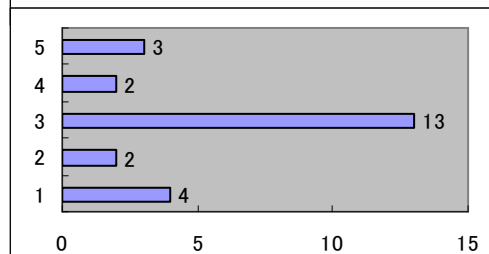
#### 問 39. 読解や文法中心の訳読式

そう思う	2人	8.3%
どちらかと言えばそう思う	5人	20.8%
どちらとも言えない	11人	45.8%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	4人	16.7%
平均	3	



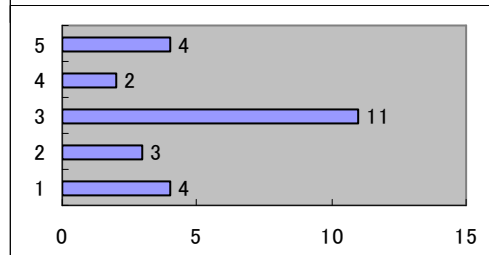
#### 問 40. リスニング中心

そう思う	3人	12.5%
どちらかと言えばそう思う	2人	8.3%
どちらとも言えない	13人	54.2%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	4人	16.7%
平均	2.9	



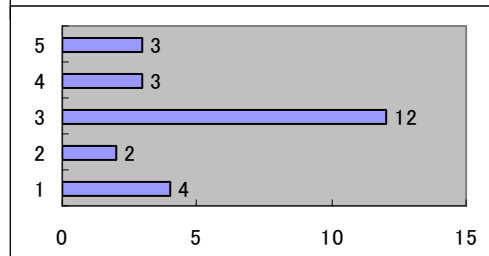
#### 問 41. スピーキング中心

そう思う	4人	16.7%
どちらかと言えばそう思う	2人	8.3%
どちらとも言えない	11人	45.8%
どちらかと言えばそう思わない	3人	12.5%
そう思わない	4人	16.7%
平均	3	



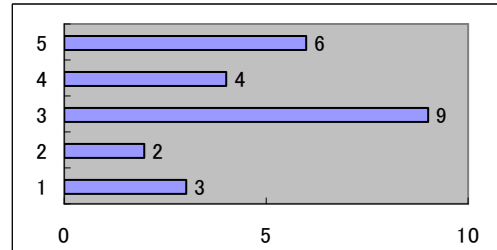
#### 問 42. ライティング中心

そう思う	3人	12.5%
どちらかと言えばそう思う	3人	12.5%
どちらとも言えない	12人	50%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	4人	16.7%
平均	3	



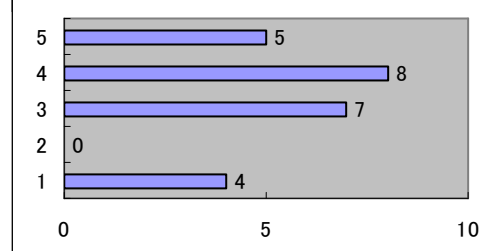
問 43. 英会話中心

そう思う	6人	25%
どちらかと言えばそう思う	4人	16.7%
どちらとも言えない	9人	37.5%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	3人	12.5%
平均	3.3	



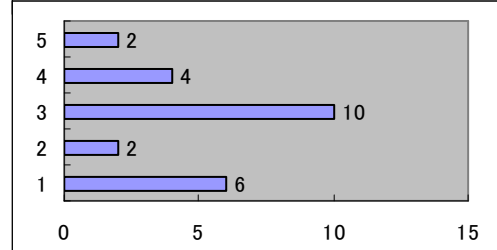
問 44. 4技能（読む・聴く・書く・話す力）をバランスよく

そう思う	5人	20.8%
どちらかと言えばそう思う	8人	33.3%
どちらとも言えない	7人	29.2%
どちらかと言えばそう思わない	0人	0%
そう思わない	4人	16.7%
平均	3.4	



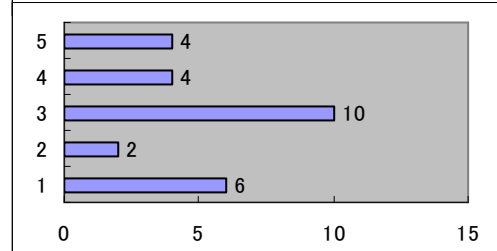
問 45. 専門に関係した教材（経営学等）を使う

そう思う	2人	8.3%
どちらかと言えばそう思う	4人	16.7%
どちらとも言えない	10人	41.7%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	6人	25%
平均	2.8	



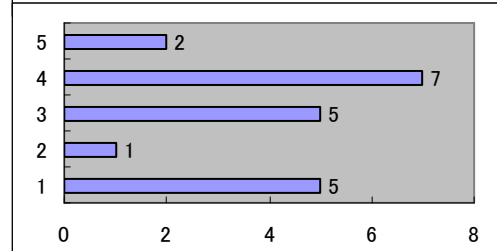
問 46. インターネットやメールを使う

そう思う	4人	16.7%
どちらかと言えばそう思う	4人	16.7%
どちらとも言えない	10人	41.7%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	6人	25%
平均	3.1	



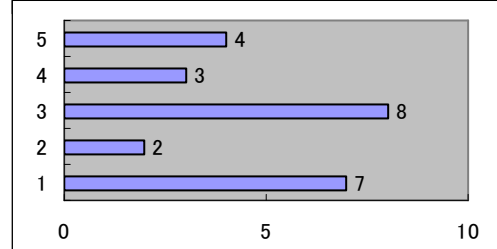
問 47. 英字新聞や雑誌を読む

そう思う	2人	8.3%
どちらかと言えばそう思う	7人	29.2%
どちらとも言えない	5人	20.8%
どちらかと言えばそう思わない	1人	4.2%
そう思わない	5人	20.8%
平均	2.7	



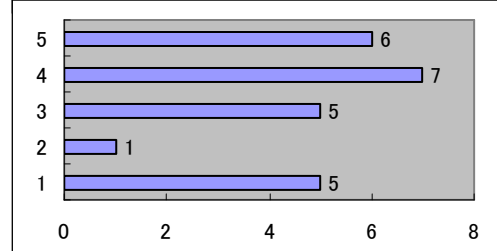
問 48. ラジオ等の英語放送番組を聴く

そう思う	4人	16.7%
どちらかと言えばそう思う	3人	12.5%
どちらとも言えない	8人	33.3%
どちらかと言えばそう思わない	2人	8.3%
そう思わない	7人	29.2%
平均	2.8	



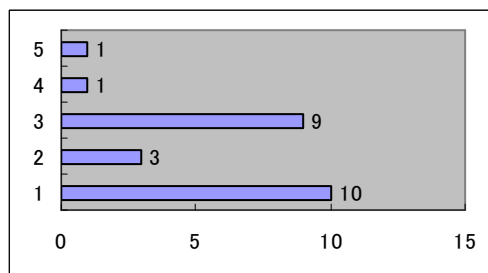
問 49. テレビやビデオ等の番組を見る

そう思う	6人	25%
どちらかと言えばそう思う	7人	29.2%
どちらとも言えない	5人	20.8%
どちらかと言えばそう思わない	1人	4.2%
そう思わない	5人	20.8%
平均	3.3	



問 50. 英語検定試験対策をする

そう思う	1人	4.2%
どちらかと言えばそう思う	1人	4.2%
どちらとも言えない	9人	37.5%
どちらかと言えばそう思わない	3人	12.5%
そう思わない	10人	41.7%
平均	2.2	



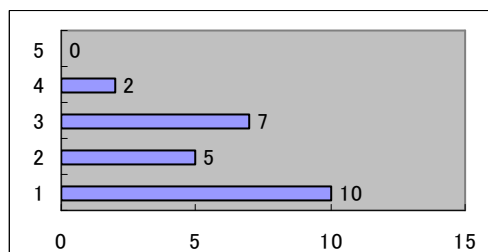
問の平均値の高さから、「英会話や4技能をバランスよく学習する」ことを望んでいることが分かる。しかし、「検定試験対策」や「英字新聞を読む」ことを希望する回答は少ない。

この項目は、どんな授業を「望むか」という学生の積極的な回答を期待してのものであるが、「～中心」という問に対して、回答し辛かったかもしれない。例えば「ライティング中心」を高校の授業時間より長い90分間の英作文だけの授業と理解しての回答であれば、消極的な回答になるのは止むを得ないかもしれない。記述式の回答では、「今のままで良い」が最も多く、続いて「英会話中心」、「文法は少な目に」等があった。1人ずつであるが、「文法をもっと習いたい」、「参加できる授業」とある。前項目と同様に、明確な目的を持って意欲的に授業に取り組もうとする態度は、窺えない。

5.8. どんな評価を望むか

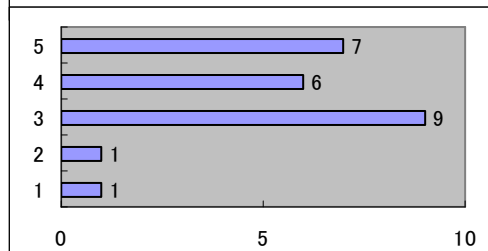
問 51. 定期試験重視

そう思う	0人	0%
どちらかと言えばそう思う	2人	8.3%
どちらとも言えない	7人	29.2%
どちらかと言えばそう思わない	5人	20.8%
そう思わない	10人	41.7%
平均	2	



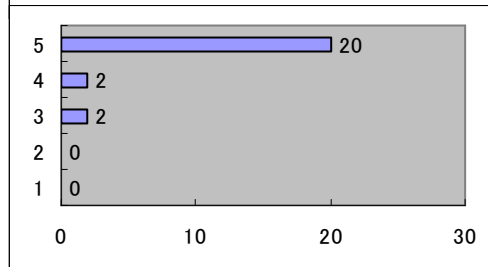
問 52. 課題やレポート重視

そう思う	7人	29.2%
どちらかと言えばそう思う	6人	25%
どちらとも言えない	9人	37.5%
どちらかと言えばそう思わない	1人	4.2%
そう思わない	1人	4.2%
平均	3.7	



問 53. 出席重視

そう思う	20人	83.3%
どちらかと言えばそう思う	2人	8.3%
どちらとも言えない	2人	8.3%
どちらかと言えばそう思わない	0人	0%
そう思わない	0人	0%
平均	4.8	



「定期考査は重視しないで欲しい（平均値 2.0）」と回答する背景には、高校時代に、暗記力を課す試験に苦しんだ経験を持つからではないだろうか。試験直前の集中的に行う、いわゆる試験勉強を嫌うのは理解できるが、「出席重視」を殆どの学生が望んでいる（平均値 4.8）ことは授業に出ることが嫌ではない、あるいは当然のことと捉えていることの表れだろう。授業者に対して否定的でないことと、出席率の高さが、その裏づけとなるだろう。山口大学の共通教育の授業アンケートでもほぼ同様の結果が出ている。「『学期末に行う試験を重視した評価』については、わずか 5.4%しか支持していない。一発勝負の試験よりも、じっくりレポートや授業の出席そのものの評価が望ましい（石川, 2000）」ということである。

定期試験のみの絶対的評価だけでなく、形成的評価である普段の学習態度や提出物等も重視した、総合的な評価を下すことが大切であろう。

## 6. 考察

学生の学習態度に着目すると、専門科目ではないためか、英語が使えるまでになるために、努力を惜しまず学習しようとする学生の強い意思が読み取れない。自ら低めの目標を設定し、英語にはあまりエネルギーを注ぎたくない気持ちが窺える。授業者の目を盗み、授業中の携帯メールは日常茶飯事である。しかし、これは本学に限ったことではない。日本中の多くの大学が同様の問題を抱えており、昨今の学生の集中力のなさや努力不足を指摘しているのだ。だが、こうした状況を教師が改善していく手を休めたら、一気に大学教育が凋落の運命をたどることは、明白である。入試に英語があるから嫌でも勉強する中・高校生ではなく、英語がなくても直接的な不利益を生じない大学生に、いかに学習意欲を高めていくのか。これはもはや大学教員の最優先の責務として取り組まなければならないだろう。

よって、教員は、この度の調査で分かった学生のニーズを全力を挙げて授業改善に反映していかなければならない。指摘された点で、教員として反省すべきところは反省し、また希望や要望を受け入れられることと、できないことを学生に伝えなければならない。授業運営が改善されれば、学生の学習態度も変わり、力も伸びていく。つまり、学生を変えていくためには、教師自らが先ず変わっていかねばならないのである。見逃すことのできない調査結果がある。学生は「英語を学ぶことは必要であり、英語力を向上させたい」という希望は、程度の差こそあれ皆持っているということだ。この希望の火を消すことがあってはならない。

次に語学教師が動機付けのために取るべき態度を教員の役割、つまり **teacher role** (Nunan, 1994) の観点から考察する。

## 6.1. 「やる気を起こさせる」指導

学生が、英語学習のやる気がなくなる時は、いつであろうか。Christophel and Gorham (1995)は、第一言語に関する調査であるが、動機の減退する要因は、教師の言動が3分の2を占めているという。また、Gorham and Christophel (1992)は、動機の減退となる要因の上位5までは、以下の通りであるとする。教師の影響が、いかに大きく関わっているかがわかる。

- 1) 成績や課題に対する不満
- 2) 教師が退屈、準備不足
- 3) 教科が嫌い
- 4) 教材の組み立てが悪い
- 5) 教師が近づきにくい、自己中心的、偏見を持つ、侮辱する

荒井(2004)は、都内私立大学の学生にアンケート調査を実施し、語学の授業でどんなときに「あなたのやる気を失なわせる」ようなことがあったか聞いたところ、「教師による要因」が最も多かったという。クラスの雰囲気やその他の要因もあるが、教師の学生に対する接し方や人柄、教え方等が、主要な動機減退要因であると、調査結果は示している。

学生との協力と意思疎通を図ることが学習を成功させるために何よりも大切である(Chambers 1993, Oxford 1998)。よって、やる気を起こさせるためには、学生との良好な人間関係作りが求められる。

教材に関しても、動機付けを高めるためには、学生の興味関心に沿ったものを探し出し、積極的に使うべきであろう。Brophy (1998)は、「ほとんどの学校の教科内容...は主として生徒が学ぶ必要があると社会が考えていることに基づいて選択されているのであり、生徒が機会を与えられたら自ら選ぶような内容に基づいていないため」、学習意欲が沸かないと述べているように、大学の教員も、学生が必要と考えている教材を提供していないことが多いのであろう。調査結果にあるように、スポーツ英語や英会話といった、彼らが求める教材は現実に存在する。彼らの要望をできる限り考慮に入れて、使用する教材を探すことから、実践して行くべきである。

## 6.2. 授業者としての批判的省察

筆者の授業が終了すると、学生は「自己評価」票を出席票代わりに提出することになっていた。授業に対するコメントを書いてくれる学生もいて、「授業内容に興味を覚えた」、

「難しすぎる」、等と率直に感想を聞ける機会となっていた。授業者は授業をやりっぱなしにするのではなく、内省的に振り返って、次回の授業の計画を立てるべきだろう。Woods(1991)は、教師は教室を出たら次のように自問し、授業評価をすべきであると提唱する。

- 1) 授業はうまく行ったかどうか、それはなぜか。
- 2) 授業の良かったところと悪かったところはどこか。
- 3) 学生は学ぶべきところを学んだか。
- 4) 授業は学生のニーズに叶ったものであったか。
- 5) 授業の難易度は適切であったか。
- 6) 授業内容は学生の興味を喚起したか。(一部省略)

指導法に関して、とかく授業者は、自分の仮説や信条によって、授業における力点が変わってくる。例えば、コミュニケーション活動が十分に行われたか、発音指導をしたか、グループ学習ができたか、シラバスに沿った授業ができたか、宿題を提出したか、等と教員の間でも、どこに主眼を置くかは変わってくる。できるだけバランス良く、授業全体を俯瞰した評価をするにあたっては、チェックリストを用いて行うことも考えたい。学生が理解していない点を学生だけの責任とせずに、教員自らの反省材料とする。さらに、昼休みやオフィスアワー等の授業時間外に、気軽に研究室に相談や質問に来れる雰囲気作りをすべきであろう。

### 6.3. 責任を持った教育

学生のニーズに叶った授業を提供するためには、彼らの声を取り入れることは大切であるし、学生に生き生きと授業に取り組みさせるために、時には迎合することも必要であろう。しかし、「英会話ができるようになりたい」と学生が言った場合に、語学教師は第二言語習得のための様々な学習方法を提示する。その中には当然、文法、発音、英作文等の多種多様な学習項目があり、一朝一夕に英会話をマスターすることはできない。英会話を楽に習得できる王道とも言うべき魔法の勉強法がある訳がないからだ。よって、ニーズ調査を行ったことで、教員が学生のために、いわば学習の逃げ道を作ってしまったら、それこそ本末転倒である。また、教員が教員としての責任を果たすために、消化不良に陥る様な量的に多くのことを教え込もうとしたら逆効果である。精選した内容を丁寧に教えられるよう絶えず努力していくことが、責任ある教員の姿であろう。最も大切なことは、今次の調査を基に、学生に高次の目標理念を抱かせ、その目標達成のために効果的な学習支援をする絶好の機会を得たと認識することである。



学生の希望に叶う授業を教員の自由裁量で全て行うことは、おそらく不可能である。なぜなら教員の信条やシラバスより上位には、大学が掲げる教育目標があるからだ。例えば、就職指導を考えた TOEIC や英語検定といった資格検定試験に対応する力をつけさせたいという大学側の希望は、「学生たちに人気がない」のは調査結果から明らかである。教員は、学生の将来を見通した大学側からの願いを提示しているのであるから、人気の有無に関わらず、その必要性を教員や事務職員が一丸となって、粘り強く伝えていくしかない。さらに、欠席、遅刻、居眠り、私語、携帯メール、等といった迷惑行為に対しては、注意されて然るべきである。但し教員は、授業のリズムを崩すことなく、そのような行為が自然となくなるような、魅力ある授業運営をすることが理想ではあるが。

おわりに

本稿は、学生から筆者の授業を評価してもらい、彼らのニーズを聞き出し、これまでの授業をいかにして改善したらよいかの実証的研究を試みたものである。つまり、授業改善の目的で、「何らかの問題に気づいたら、実態の把握と原因の究明に努め、対策を講じて実践し、結果を検証して解決を目指す、アクション・リサーチ（佐野，2005）」であると言える。この研究方法は、時に標本数の小ささや、信頼性、妥当性における問題点が指摘されるが、今後も授業改善の手を休めずに、継続的に調査・研究を行うことで、それらの問題は、解決できるであろう。

この度の調査では、学生の大まかな実態を把握することができたが、今後は地域の産業界や高校等からも、より広範に、より詳細に様々な観点からデータを収集・検証し、本学にとって相応しい英語教育プログラムを構築していきたい。

「教員に熱意が感じられたか」と「教員が分かりやすく教えていたか」の間に高得点がついたのは、授業者へのお世辞も含まれているとしても、率直に嬉しさを隠せない。長い教員生活でいい授業ができたと思うことは年に1度あれば良い位であるが、いい授業をしたいと思って教室に向かうことは、毎日である。

学生の希望を聞いた以上は、真摯に受け止め、授業改善に反映できることと、できないことを学生に伝えなければならない。だからと言って、安易に学生に迎合して、授業レベルを下げたり、試験問題を易しくするのではなく、しっかりとした学習指針を示し、自律的な学習方法やリサーチ方法なども授業に組み入れて行きたい。また高い目標を抱き、自ら問題意識を持ち、自主的に学習する態度は、学生には何よりも大切である。教員は連携を取りながら、この態度を養うために支援をして行くことが肝要であろう。

さらに実証的な研究を積み重ねて行き、本学に最も相応しい英語教育プログラムを構築したい。

## 参考文献

- 荒井貴和 (2004). 「何が外国語学習者のやる気を失わせるか?—動機減退の原因とそれに対する学習者の反応に関する質的調査—」『東洋学園大学紀要 No.12』.
- 石川巧 (2000). 「1999 年度後期共通教育高年次授業アンケートの調査結果」山口大学.  
<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~cge/news-4-99kekka.htm>. (2006/07/07).
- 小野博 (2005). 「プレースメントテストから明らかになった日本の大学生の基礎学力構造」『日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育』(NIME 研究報告) 独立行政法人メディア教育開発センター, 1-6.
- 佐野正行 (2005). 『はじめてのアクション・リサーチ』大修館.
- 田口勇 (2002). 「平成 13 年度学生による授業評価報告書」専修大学経営学部.
- 遠山敦子 (2003). 「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」文部科学省.
- 北海道大学 (2005). 「平成 16 年度授業アンケート特別版」.  
<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/tenken/hokoku/2005/report.html>. (2006/10/01).
- 横山彰三 (2005). 『ESP 教授法に基づく大学専門英語教育のための効果的シラバスと教材開発の研究』エスアイエス.
- Brophy, J.E. (1998). *Motivating Students to Learn*. McGraw-Hill, Boston, MA.
- Chambers, G. (1993). "Talking the 'de' out of demotivation." *Language Learning Journal*, 7, 13-16.
- Christophel, D. and Gorham, J. (1995). "A test-retest analysis of student motivation, teacher immediacy and perceived sources of motivation and demotivation in college classes." *Communication Education*, 44, 292-306.
- Gorham, J. and Christophel, D. (1992). "Students perception of teacher behavior as motivating and demotivating factors in college classes." *Communication Quarterly*, 40, 239-52.
- Nunan, D. (1994). *Syllabus Design*, Oxford University Press.
- Oxford, R. (1998). "The unraveling tapestry: Teacher and course characteristics associated with demotivation in the language classroom." Paper presented at the TESOL '98 Congress, Seattle, WA.
- Richards, J. C. (2005). *Curriculum Development in Language Teaching*, Cambridge University Press, N.Y.
- Woods, D. (1991). "Teachers' Interpretations of Second Language Teaching Curricula." *RELC Journal*, 22(2), 1-18.